

青春×カントボーイ種
付け5連発

収録作品

- | | |
|---------------------------------------|--------|
| 1. 「花火が止むまで帰さないから」 河川敷の暗がりでは幼馴染に浴... | ... 3 |
| 2. 「練習中に勃ってんのバレてたぞ？」 汗だくバスケット部キャプテ... | ... 24 |
| 3. 「怖いなら俺に掴まれよ」 廃校の肝試しで暗闇に二人きり、先... | ... 49 |
| 4. 「今年の出来を、お前の身体で確かめさせろ」 収穫祭の夜にワ... | ... 76 |
| 5. 「今夜は帰らないでくれ」 毎月通い詰めた常連作家に浴衣を剥... | ... 98 |

「花火が止むまで帰さないから
」 河川敷の暗がり で幼馴染に
浴衣を剥かれ4回種付けされた
カントボーイ大学生の話

「探してた」

心臓が止まった。

振り向く。Tシャツにジーンズ、祭りに来る格好じゃない。日焼けした腕、太い首、現場仕事で鍛えあげた体格。——涼介。

「……嘘。何でここにいの」

「嘘じゃない。ここに来ると思ってた。お前、昔からここに逃げるだろ。人混み苦手で、毎年ここに」

6年分の観察が、低い声に凝縮されていた。

涼介が隣に座る。近い。肩が触れる距離。花火の閃光が横顔を照らして、目が据わっているのが見えた。いつもの涼介じゃない。

「涼介……？」

「帯、ゆるいな」

指が、帯に触れていた。

「りょう——」

——花火が一際大きく弾けて、颯太の声をかき消した。

するり♡と帯が解ける。浴衣がはだけて、蒸し暑い夜気が素肌にまとわりつく。

「やめっ……涼介、なに——」

「知ってる。お前のここ」

日焼けした硬い手のひらが、下腹に押し当てられた。下着越しに、颯太の秘密を——カントの割れ目を、指が正確になぞる。

「ッ……♡♡」

(知って……知ってたの……？)

身体が凍りつく。呼吸ができない。隠してきた。誰にも言わなかった。男の身体に女の性器がついている——そのコンプレックスを21年間、胸の奥に押し込めてきた。

「高2の夏。保健室で着替えてるのを見た。それからずっと——6年、我慢してた」

涼介の声は低くて、静かで、だからこそ怖かった。

草の上に押し倒される。涼介の硬い手が両手首をまとめて頭上に押さえつけた。コンクリートみたいに硬い手のひら。颯太の細い手首なんか片手で足りる。

「りょうすけっ……離して……っ♡♡」

「花火が止むまで帰さないから」

浴衣が左右にはだけて、白い下着だけが花火の閃光に照らされた。

涼介の指が下着の上から割れ目を辿る。布越しに、くぷ♡と指先が沈み込んで、汗と蒸れで湿った布地がカントの粘膜にぴったり張りつく。

「んっ……♡♡ やだっ……触らないでっ……♡♡♡」

「6年待った。今夜は触る」

ゆっくり。上から下へ。布越しなのに、指先が割れ目のかたちをなぞって、そこがどういう構造をしているのか確かめるみたいに丁寧に押し込んでくる。

(やだ……っ♡♡ からだが……っ♡♡)

触られたくない場所だった。自分でも極力触らないようにしてきた

場所。なのに涼介の指が押し当てられた瞬間から、そこがじわ♡じわ♡と熱を持ち始めている。

下着に、染みが広がっていく。

「もう濡れてんじゃん。触られるの待ってたみたいだな、このまんこ」

「ちがっ……♡♡ そんなの……ちがう……っ♡♡♡」

（ちがう。ちがうのに。こんなとこ、感じるわけない——）

でも身体は嘘をつかない。涼介の指先が布越しにクリトリスの上を通過するたび、ぞく♡と背筋に電気が走る。逃げようとして腰をずらしても、涼介の手がそれを追ってくる。

——くい♡と、下着がずらされた。

夜風がカントに直接触れる。ひやり♡として、次の瞬間、花火の光が颯太のそこを照らした。

「エロ……」

涼介の喉仏が動いた。唾を飲み込む音。

「6年想像してたより、全然エロいわ。お前のまんこ」

「見ないでっ……♡♡ 見ないでよ……っ♡♡♡」

（見られてる……♡♡ おまんこ……涼介に全部見られて……っ♡♡♡）

濡れて光る粘膜。閉じた割れ目の隙間から蜜が糸を引いている。断続的な花火の閃光が、そのすべてを涼介の目に焼きつけていく。

直接、指が触れた。

「ひうっ♡♡♡」

濡れた割れ目を二本の指でゆっくり開かれる。中のやわらかい肉ひだが夜気に晒されて、ぷるん♡と震えた。涼介の指先がそのひだを一枚一枚、確かめるように撫でていく。

「あ♡ あ♡ ん♡♡ そこっ……♡♡ 触んないでっ……♡♡」

「ここか」

包皮が剥かれた。小さく膨らんだクリトリスに、涼介の親指の腹がじかに触れる。

——びくんっ♡♡♡

颯太の腰が草の上で跳ねた。反射的に脚を閉じようとするけど、涼介の肩幅がそれを許さない。

「いやっ♡♡ そこダメっ♡♡ だめだめっ♡♡♡」

「ダメなところをこうすると？」

くり♡くり♡と。クリトリスを親指と人差し指で挟んで、捏ねまわす。

「ひあゝっ♡♡♡ やっ♡♡ やあゝっ♡♡♡ りょうすけえ……っ♡♡♡」

（だめっ♡♡ あたま……真っ白に……なるっ♡♡♡）

花火の光が二人を赤く染めて、影を作って、また闇に沈める。そのたびに涼介の指はクリトリスを捏ね、割れ目から溢れた蜜が太腿を伝って草を濡らしていた。

「っ♡♡ んっ♡♡ りょうすけ……っ♡♡ もう、むり……っ♡

♡♡」

涼介がジーンズの前を開けた。金属のボタンが外れる硬い音。——そこから出てきたものの熱が、颯太の内腿に触れる。

「ま……っ♡♡ 待って涼介……それ……っ♡♡」

硬い。熱い。脈を打っている。日焼けした手でそれを掴んで、涼介が颯太のカントの割れ目に沿わせるように押し当てた。

「入れない。まだ入れない。……挟ませて」

ずり……♡♡ ずり……♡♡

カントの肉ひだに、涼介の肉棒が擦りつけられる。颯太の愛液がローション代わりになって、ぬるぬると滑る。

「ひっ♡♡ ん、う♡♡ りょうすけっ……すごい硬いっ♡♡♡」

(男の……おちんちんが……おまんこに……擦りつけられて……っ♡♡)

張り出したカリ首が割れ目に引っかかるたび、ぐちゅ♡ぐちゅ♡と卑猥な水音が花火の隙間に漏れる。肉棒がクリトリスの上を通過するたび、颯太の身体がびくん♡と跳ねた。

涼介の腰の動きが速くなる。

ぬちゃ♡ぬちゃ♡ずちゅ♡ずちゅ♡——水音が激しさを増して、肉棒の裏筋がクリトリスをこりこり♡と擦り上げるたびに颯太の視界が白く弾ける。カリ首が膣口に引っかかって、はずれる。入りそうで入らない——その焦らしが、カントをさらに蕩けさせた。

「6年分だからな。硬くもなる」

涼介の声は低く、抑えているけど余裕がない。

「あゝっ♡♡ あゝ あゝっ♡♡♡ だめっ♡♡ なんかつ♡♡ お
なか……キュンキュンしてっ……♡♡♡」

——ぶしゅ♡♡

素股だけで、颯太は軽い絶頂を迎えた。カントがきゅうっ♡♡と収縮して、じゅわ……♡♡と愛液が溢れて涼介の肉棒をてらてらに濡らす。太腿が痙攣して、涼介の腰に絡みつく。

（イッ……ちゃっ……た……♡♡♡ 素股で……こんなので……っ♡♡♡）

涼介の目の色が変わった。

「入れる」

「ま……待っ——ッ♡♡」

待たなかった。

ずぶ……♡♡

先端がカントの入口をこじ開ける。素股で濡れきったカントにカリ首がめり込んで、肉ひだが押し開かれていく。

「あゝ……っ♡♡ はいっ……てくる……っ♡♡♡」

涼介が颯太の腰を両手で固定した。ゆっくり、しかし止まらずに、奥まで押し込む。

ぬ……ちゅ……♡♡ ずぶ……♡♡ ずぶずぶ……♡♡♡

中の肉壁が涼介のかたちに押し広げられていく。カリの段差が膣壁

の凹凸を一つ一つ乗り越えるたび、ぐにゅ♡ぐにゅ♡とやわらかい肉が絡みついた。

「きつ……っ。処女だろ、お前。すげえ吸いついてくる」

「あゝ あゝ ……っ♡♡ なか……涼介の……っ♡♡ おなか、いっぱい……っ♡♡♡」

（男なのに。男なのに、おまんこに——おちんちんが入ってる……♡♡♡）

根元まで。颯太の中で涼介のものが脈動している。先端が子宮口に当たって——コッソ♡——硬いものにぶつかった感触に、颯太の目から涙が溢れた。

涼介が動き始める。最初はゆっくり、奥のかたちを確かめるように。引くときにカリ首が膣壁を搔き出し、押し込むときに子宮口を小突く。

「んっ♡♡ あっ♡♡ あっ♡♡ そこっ♡♡ 奥っ……つかないでっ……♡♡♡」

「無理。ここにしか出したくない。お前の一番奥に」

速度が上がった。6年分の衝動が、涼介の腰から颯太の中に叩き込まれる。

ずちゅっ♡ずちゅっ♡ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡——颯太の愛液が搔き出されて、結合部に白い泡が立つ。涼介の腰が打ちつけられるたび、ぱちゅん♡ぱちゅん♡と粘液が弾ける音が響いた。草の上で颯太の身体が前後に揺さぶられる。

「あっ♡あっ♡あっ♡ りょうすけっ♡♡ おなかっ……奥っ♡♡つかないでって言うてるのにな♡♡♡」

花火のスターマインが始まった。連続する破裂音のカーテンの向こうで、涼介が腰を叩きつける速度が上がる。ぱん♡ぱん♡ぱん♡と

日焼けした下腹が颯太の白い太腿にぶつかる音。浴衣の裾が乱れて、花火の光に二人の結合部が照らされた。

涼介の手が颯太の胸元に入り込む。浴衣の合わせから指を滑り込ませて、乳首をつまみ上げた。

「ひあゝっ♡♡♡」

上と下から同時に。乳首を引っぱられながら奥を突かれて、颯太の頭が真っ白に弾けた。

「やゝっ♡♡ そこ……だめっ♡♡ ちくび、ひっぱらないでっ♡♡ おまんこもっ♡♡ おなかの奥もっ♡♡ いっぺんにされたら……っ♡♡♡」

「いっぺんにされたら？」

「おかしく……なるっ♡♡♡」

「なれよ」

ずんっ♡♡ ずんっ♡♡ ずんっ♡♡——

「中に出す。お前の子宮に、全部ぶちまけてやる」

「やだっ♡♡♡ なかつ♡♡ なかはダメっ♡♡ だしちゃダメえっ♡♡♡」

涼介が奥まで突き上げて——子宮口にカリを押し込んだまま、動きを止めた。

——ど、ちゅんっっ♡♡♡

びゅるるるっ♡♡ びゅるるるっ♡♡

「あゝ あゝ あゝ っっ♡♡♡ 出てるっ♡♡ なかにっ♡♡ あっっ♡♡ 涼介のせーし……子宮にっ♡♡♡」

精液が颯太の子宮内に直接注がれた。熱くて、どろりとしていて、

カントが涼介のものを搾るように痙攣収縮する。子宮に精液が叩きつけられる——びちゃ♡びちゃ♡——その衝撃が腹の奥から脳天まで突き抜けて、颯太は中出しと同時に絶頂した。

(中に出されたっ♡♡♡ おまんこに……男の人の精子……入っちゃった……っ♡♡♡)

花火の光が断続的に二人を照らす。草の上に仰向けの颯太、その上に覆いかぶさる涼介。繋がったまま——涼介は、抜かない。

＊

「ん……っ♡♡ 抜いてよ……♡♡ もう終わったでしょ……っ♡♡♡」

「終わってない。全然足りない。6年分はこんなもんじゃない」

涼介が颯太を抱き上げた。繋がったまま、涼介があぐらをかいて、その上に颯太をまたがらせる。ず、ちゅん……♡♡と自重で奥まで落ちて、さっき注がれた精液がぐちゅ♡♡と結合部から押し出された。

涼介が颯太の下腹を手のひらで撫でる。

「ここに俺のが入ってる」

「やだ……っ♡♡ そんなの……触らないでっ♡♡♡」

(おなか……涼介のせーしで……あったかい……♡♡♡)

認めたくなかった。気持ちいいなんて認めたくなかった。男なのに——おまんこに中出しされて、それで気持ちよくなるなんて。

涼介の腰が下から突き上げた。

「お前が大学で男と話してるだけで気が狂いそうだった」

ずちゅっ♡♡

「バイト先の先輩と飯行っちゃって聞いた日、壁殴った」

ぐちゅっ♡♡

「お前のまんこは俺のだ。他の誰にも触らせない。見せない。嗅がせない」

じゅぷっ♡♡♡

一言ごとに突き上げ、一言ごとに深く挟む。颯太は突かれるたびに声が漏れて、涼介の独占欲に身体ごと貫かれた。

「りょう……すけ……っ♡♡ そんな……こと……ずっと……思っ
…っ♡♡♡」

「ずっと。お前の隣にいて、友達ヅラして、毎晩お前のまんこ想像して抜いてた。惨めだろ？ でももう我慢しない」

涼介の空いた手が颯太の尻に回った。精液と愛液で濡れた指が尻の谷間を辿って——もうひとつの穴に触れた。結合部から溢れた体液がそこまで伝っていて、ぬるり♡と指が入り込む。

「ひっ♡♡♡ りょうすけっ……そこっ……♡♡そこは、ちがっ♡♡♡」

「ここもお前の穴だろ。全部俺のだ」

カントに肉棒。後孔に指。二穴同時の刺激に颯太の背中が反り返った。

（ふたつ……同時にっ♡♡♡ おまんこにおちんちん入ってるのに……おしりにも……っ♡♡♡）

薄い壁を一枚隔てて、指と肉棒がお互いの存在を確認し合っている。内臓が両側から圧迫されて、これまで感じたことのない快樂が下腹を焼いた。

「あゝ あゝ っ♡♡ やだっ♡♡ ふたつ……いっぺんに……っ♡♡
おかしく……なるっ♡♡♡」
「おかしくなれよ。俺のせいで狂え」

涼介のもう片方の手が結合部の上——クリトリスを見つけた。挿入しながら、包皮を剥いて直接弾く。

三点同時。

「ひあゝ あゝ あゝ っ♡♡♡ そこっ♡♡ だめっ♡♡ おまんこも
おしりもクリトリスもっ♡♡ ぜんぶ同時にされたらっ♡♡♡」
「ここ触ると中がすげえ締まる。まんこも尻の穴も。身体正直すぎ
んだろ、颯太」

（いやだっ♡♡ ちがうっ♡♡ 男なのにこんなの……こんなので
感じてるのバレたくないのにっ♡♡♡）

下から突き上げながらクリトリスを捏ね回して、後孔に二本目の指
を押し込む。カントからぐちゅぐちゅと精液と愛液が混ざった音が
響いた。

抵抗の言葉が消えていく。代わりに——涼介の名前だけが、繰り返
し零れた。

「あゝ っ♡あゝ っ♡あゝ っ♡ りょうすけ♡♡ りょうすけゝ …
…っ♡♡♡」
「名前呼べ。もっと呼べ」
「りょ……う……すけっ♡♡♡ おなか……また……あつい、の…
…きて……っ♡♡♡」

涼介がクリトリスを弾きながら奥を突き上げ、同時に後孔の指を奥
までねじ込んだ。

颯太が絶頂した。カントと後孔が同時にびくびく♡♡痙攣して、涼
介の肉棒と指を一緒に締めつける。その収縮に搾り出されるように

、涼介が2回目の射精——子宮にずぶずぶと注ぎ込んだ。

「ん` お` お` お` ……っ♡♡♡ またっ♡♡ また中にっ♡♡
いっぱい出てるっ♡♡♡」

颯太の下腹が精液で膨れている。涼介がそこを手のひらで押すと、
結合部からどろり♡♡と白い液が溢れ出した。

「ここに俺のが入ってる。……孕んだかもな」

「え……♡♡」

「カントボーイは妊娠できるんだろ。今日は中日だったりしてな」

「そんなっ……♡♡ やだっ♡♡ 孕んだら……どうすんのっ♡♡
♡」

「どうもしない。俺が飼う」

涼介の目は笑っていなかった。本気だった。

颯太の目から涙が零れる。恐怖じゃない。6年分の執着の圧に、身体ごと潰される感覚に——カントが、勝手にきゅん♡と涼介を締めつけた。

＊

花火が後半に入った。大玉が連続で上がり始める。まだ終わらない。
。

涼介が颯太を四つん這いにした。草の上に両手をつかせて、浴衣は肩から完全に落ちて背中が露出する。尻が突き出される格好。カントから精液がとろり♡と糸を引いて太腿の内側を伝う。後孔も指で解されてぱくぱく♡と閉じきらない。汗と体液で全身がてらてら光っていた。

「こっからが本番だ」

「まだ……やるの……♡♡」

(もう2回も中出しされたのに♡♡ おまんこ……精子でいっぱいなのに……♡♡♡)

自分の声に、もう抵抗の色がないことに颯太は気づいていた。身体が既に涼介のものを求めている。カントがひくひく♡と収縮して、空になった中を埋めてほしいと訴えていた。

涼介が颯太のカントを後ろから指で広げた。中を覗き込む。二発分の精液が奥から溢れて、ぐちゃぐちゃの粘膜が花火の光にぬらぬら光っている。

「お前のまんこ、俺の精子でいっぱいだな。……でもまだ入る。もっと奥に詰め込んでやる」

ポケットからローションの小瓶を取り出した。颯太の後孔に垂らすと、冷たい液体にびくり♡と身体が震える。

「りょうすけ……っ♡♡ むり……両方なんて……っ♡♡♡」

「無理じゃない。お前の身体は俺が一番知ってる」

背後からカントに一気に貫いた。

ずぶんっ♡♡♡

精液でぬかるんだ中を根元まで突き入れる。同時に後孔に指を二本——ずぶっ♡♡と押し込んだ。

「あゝ あゝ あゝ っ♡♡♡ うしろから……っ♡♡ ぜんぶ……入ってっ♡♡♡」

颯太が草を掴んで叫んだ。花火の破裂音はその声をかき消す。

後ろからだと角度が変わる。カリ首がGスポットをダイレクトに擦って——さらに薄い壁を隔てて後孔の指が反対側から同じ場所を圧迫する。Gスポットが内外から挟み撃ちにされた。

ばんっ♡ばんっ♡ばんっ♡ばんっ♡——涼介の下腹が颯太の白い尻を叩く音。

ぐちゅ♡じゅぷ♡——カントから精液が押し出される音。

くちゅくちゅ♡♡——後孔から指が出入りする音。

三つの音が重なって、花火の合間に猥雑な合奏を奏でた。

「ひっ♡♡ あっ♡♡ あゝ あゝ っ♡♡ そこっ♡♡ おまんこのそこ当たるとっ♡♡♡」

「ここか？ ここ当たると声変わるし、尻の穴もきゅってなる」

涼介が腰の角度を固定してGスポットを執拗に突く。同時に後孔の指をGスポットに向かって押しつけて、肉棒と指で薄い壁をぐにぐに♡♡挟んだ。

颯太のカントから愛液が噴くように溢れた。精液と混ざって涼介の太腿を汚す。

ずちゅっ♡ぐちゅっ♡にちゃっ♡じゅぷっ♡——

くちゅ♡くちゅ♡ぬちゅ♡——

精液と愛液とローションが混ざり合った、粘度の高い水音。

「だめ……っ♡♡ こえっ……出ちゃう……っ♡♡ 誰か来たら…っ♡♡♡」

「花火の音でかき消してやるから。好きなだけ鳴けよ」

涼介が颯太の髪を掴んで、顔を上向かせた。ちょうど花火が打ち上がって、涙と涎で汚れた顔が赤、青、金の光に照らされる。口が半開きで涎が顎から糸を引き、目は潤んで焦点が合っていない。

（もう……だめ……っ♡♡ おまんこもおしりも涼介でいっぱいっ♡♡ からだ全部……涼介に……犯されてるっ♡♡♡）

颯太のカントが——涼介の肉棒を、自ら締めつけ始めた。腰が勝手に後ろに押し返す。後孔も指を締め込んで離さない。もう身体が拒否していない。貪っている。

「あゝっ♡♡ りょうすけ……もっと……♡♡♡」

自分で言ってから、驚いた。

もっと？ ——今、もっとって言った？

「……言えよ、ちゃんと。何がもっとなんだ」

「おちんぼ……♡♡ もっと奥に……おちんぼ……ほしい……♡♡
♡ おしりも……指もっと入れて……♡♡♡」

(男なのに……おちんぼほしいって……自分から言っちゃった♡♡♡)

壊れた。颯太の中で、何かが決定的に砕けた。

涼介が獣みたいに腰を叩きつけた。後孔に三本目の指を押し込む。

ずぶずぶずぶずぶっ♡♡♡ どぐちゅっ♡♡ どぐちゅっ♡♡

「お前のまんこに子種全部注いでやる。俺のガキ孕め」

「はらむ♡♡ はらんじゃう……っ♡♡ りょうすけの赤ちゃん…
…おなかにい♡♡♡」

孕ませの言葉に颯太のカントが痙攣した。子宮が降りてきて、涼介の先端を咥え込む。

涼介が奥を突き上げて——3回目の射精。

びゅくっ♡♡びゅくっ♡♡

子宮に精液が叩きつけられる。

「あゝ あゝ あゝ っ♡♡♡ イグっ♡♡♡ おまんこイっちゃうっ♡♡♡」

颯太が潮を吹いた。ぷしゅっ♡♡ぷしゅっ♡♡と結合部から液体が噴き出して草を濡らす。後孔もびくびく♡♡と涼介の指を締めつけて痙攣が止まらない。

四つん這いのまま崩れ落ちた。顔を草に押しつけて、尻だけが上がった格好。浴衣はもう体の下でぐしゃぐしゃに丸まって、布の意味をなしていない。

カントから三発分の精液がどろどろと溢れている。後孔もぱくぱく♡と閉じきらず、体液が太腿を伝って草に滴った。

涼介が後ろから覗き込む。颯太の尻が――微かに揺れている。自分で腰を動かしている。空になったカントが、もの欲しそうにひくひく♡♡と収縮していた。

「まだ花火、終わってないぞ」

颯太がうつ伏せのまま――腰だけを持ち上げた。自分から。カントを涼介に向けて差し出す。精液まみれの穴を、見せつけるように。

「……いれて♡♡ まだ……ほしい♡♡♡ おちんぼ……おまんこに……♡♡♡」

涼介が目を見開いた。次の瞬間、唇の端が上がる。

「最高だよお前」

＊

涼介が颯太を仰向けに戻した。

草の上、ぐしゃぐしゃの浴衣の上に横たわる颯太。目がとろん♡♡と蕩けて、口が半開きで涎が顎を伝っている。涙の跡。汗で張りついた前髪。身体中が精液と愛液と汗で汚れて——でもカントはまだひくひく♡♡と涼介を求めている。

涼介が颯太の両脚を持ち上げて、自分の肩に担ぎ上げた。颯太の腰が浮いて、カントが完全に無防備に晒される。三回分の精液でどろどろのカントに——四度目。

ぬるん♡♡

一瞬で奥まで到達した。抵抗なく根元まで飲み込んで、子宮口が涼介の力に吸いついた。

「あゝ……♡♡ また……入ってきた♡♡ りょうすけの……おちんぽ♡♡♡」

「お前のまんこ、もう俺の形だな。他のチンポ入れても合わねえぞ」

「いらないっ♡♡ 他の……いらない♡♡ りょうすけのだけでいい……っ♡♡♡」

（認めちゃった♡♡ 涼介のおちんぽだけでいいって……認めちゃった……♡♡♡）

涼介が腰を叩き込んだ。最初から全力。溜めも容赦もない。四回目ともなれば颯太のカントは涼介の肉棒を完全に覚えていて、力りが当たる場所、幹が擦る角度、先端が子宮口を叩くりズム——すべてに反応して、カントが自律的に締めたりゆるめたりする。

ずちゅっ♡ずちゅっ♡ぱちゅっ♡ぱちゅっ♡——水音が途切れない。三回分の精液がローション代わりになって、ピストンのたびにぬるぬる♡♡と泡立った。

涼介が颯太の腰を持ち上げて角度を変えた。子宮口を真下から突き上げる。

「あゝっ♡あゝっ♡あゝっ♡ おくっ♡♡ おくぅゝ ……っ♡♡
こわれるっ♡♡♡」

「壊れろ。全部壊して俺の色に塗り替えてやる」

涼介の親指がクリトリスに伸びた。挿入しながらくりくり♡♡と弾く。子宮口を突き上げながらクリトリスを刺激する二重攻撃。

花火のフィナーレが始まった。夜空が一面に明るくなる。連続する破裂音のカーテンの向こうで——颯太が壊れる。

「イゝクッ♡♡ イっちゃうっ♡♡ りょうすけのおちんぽで……
おまんこ……イゝグううっ♡♡♡」

「俺も出る——最後の一発、子宮にぶちまけてやる」

涼介が子宮口にカリを押し込んだまま——最後の射精。

びゅるるっ♡♡びゅるるっ♡♡

四度目の精液が子宮に注がれた。

「あゝひいゝっ♡♡♡ またっ♡♡ 子宮にっ♡♡ セーし♡♡
全部……全部入ってくるっ♡♡♡」

颯太のカントが痙攣して、子宮がびくびく♡♡と精液を飲み込んだ。意識が途切れるほどの絶頂——ぷしゅ♡♡ぷしゅ♡♡と潮を噴きながら涼介にしがみつく。涼介も颯太の中に精液を絞り出しながら、その身体を腕に閉じ込めた。

花火の光がフラッシュのように二人を照らし続ける。夜空が燃えている。でもその下で、颯太はもう空しか見えていなかった。涼介の熱だけが、世界の全部だった。

＊

フィナーレが終わった。

静寂が戻ってくる。虫の声。川のせせらぎ。二人の荒い息。火薬の残り香。

涼介が繋がったまま颯太を抱えて起き上がった。草と土がついた浴衣をそのままに、颯太は涼介の膝の上で力なく肩に頭を預けている。

カントから溢れた精液が涼介の太腿を伝って、草を汚していく。ぐちゅ……♡♡と中で涼介のものがまだ脈動している。四回射精してもまだ半勃ちのまま、颯太の中に居座っていた。

「……帰らないとな」

涼介が言うけど、抜く気配がない。手は颯太の腰に回ったまま。指が無意識に尻を揉んでいる。

颯太がぐちゅり♡♡とカントで涼介のものを締めた。涼介の呼吸が変わる。中のもの——また硬くなり始めている。

「りょうすけ……また……大きくなってる……♡♡」

「お前が締めるからだろ」

「……だって♡♡ おちんぼ抜けたら……中のせーし全部出ちゃう♡♡ もったいない……♡♡♡」

涼介の手が颯太の腰骨を掴む力が強まった。

遠くで祭囃子の残響。帰り道の雑踏。でも二人はまだここにいる。

花火は終わった。でも涼介のからだは終わっていない。颯太のカントも——終わることを拒んでいる。ひくひく♡♡と涼介のかたちに締めつけながら、もう一回をねだるみたいに、とくん♡とくん♡と脈打っていた。

河川敷の暗がり、夏はまだ終わらない。

「練習中に勃ってんの
バレてたぞ？」 汗だくバスケット部
キャプテンに用具室のマットで
6回種付けされたカントボーイ
マネージャーの話

「きゃっ……♡」

情けない声が出た。体育館にはもう誰もいない。モップを持ったまま振り返ると、汗だくの鬼頭先輩が立っていた。タンクトップ型のユニフォームが胸板に貼り付いて、腹筋の稜線がくっきり浮いている。首筋を伝った汗が鎖骨の窪みに溜まっていた。

「柚木。用具室、来い」

「え……なに――」

「いいから来い」

逆らえなかった。鬼頭先輩がコートで見せる、ドライブで切り込む直前の目をしていたから。

鉄扉が閉まる。がちゃん、と鍵の音。

用具室は蒸し暑かった。積み上げられたマット。ボール籠。天井近くの小窓から差す西日が埃を金色に照らしている。汗とゴムと、鬼頭先輩の体温を含んだ匂いが充満していた。

僕の肩を掴んで、マットに押しつけられる。背中が柔らかい面に沈んだ。

「ずっとお前のこと、コートから見てた」

心臓が跳ね上がる。

「お前も見てただろ。タオル渡すとき、いつも顔赤かった」

「そ、そんなの――」

「嘘つくな」

顔が近い。鬼頭先輩の息が頬にかかる。練習後の荒い呼吸。

「あともう一個、バレてっから」

鬼頭先輩の目が、僕の股間に落ちた。

「練習中に勃ってんの——ずっと見えてたぞ」

血が逆流した。否定できない。コート脇でしゃがむたびに、鬼頭先輩の走る姿を目で追うたびに、僕の身体は勝手に反応していた。

「——あと、お前がカントだったのも。着替えのとき見えた」

「っ……！」

一番知られたくなかった。この身体のこと。男なのに女の性器がついている、この——

「だから呼んだ。もう我慢できねえんだよ、俺」

大きな手がジャージの腰紐にかかった。

「やっ——せんば、待って——！」

待たなかった。ジャージとボクサーパンツを一息で引き下ろされる。夏の空気が剥き出しの下半身に触れて、鳥肌が立った。

薄い産毛。閉じた割れ目。小さなクリトリスが——練習中からずっと疼いていたせいで——僅かに腫れている。

鬼頭先輩が、それを見た。

「……マジで」

「見ないで……っ♡」

手で隠そうとした。けれど鬼頭先輩の片手が僕の両手首をまとめて掴み、頭上のマットに縫い止めてしまう。バスケで鍛えた握力だ。振り解けるわけがない。

「隠すな。俺に見せろ」

「やだ……やだよ……っ♡」

「まんこだ。お前、めちゃくちゃ綺麗なまんこしてんな」

(……綺麗って、なに言って——)

男のくせに、まんこなんか持ってるのがコンプレックスだったのに。先輩の声は嘲笑でも嫌悪でもなく、ただ貪るような熱で。

「きれっ——そういうの言わないで……っ♡♡」

鬼頭先輩の中指が、クリトリスに触れた。

ちょん、と——たったそれだけ。

「ひんっ♡」

身体がびくんと跳ねた。自分でも信じられないくらい大きく。

鬼頭先輩の目が光った。獲物を見つけた獣みたいに。

「すっげ反応。ここ、そんな感じなのか」

「触んな……っ♡ 触んないで……っ♡♡」

聞いてない。中指の腹がクリトリスの包皮を押し退けて、直接——むき出しの突起をくりくりと転がし始めた。

くちゅ……♡

「っひ♡ ひぁ♡ やっ——せんぱ——♡♡」

濡れている。自分のソコが。鬼頭先輩の指先に、透明な液体が纏わりついていくのが分かった。

（なんで……なんで触られただけで、こんな……♡♡）

男なのに。僕は男なのに。クリトリスを弄られてこんなに——

「お前、めっちゃ濡れてんじゃん」

鬼頭先輩が指を持ち上げた。人差し指と中指の間に、透明な愛液が糸を引いている。

「触っただけでまんこがトロトロだぞ。練習中もこんななったのか？」

「ちが……っ♡ ちがう……っ♡♡」

違わない。本当は、ずっとこうだった。鬼頭先輩がダנקを決めるたび、速攻でコートを駆けるたび、汗を拭ってくれとタオルを投げてくるたび。僕のカントは、ずっと——

指が戻ってきた。今度はクリトリスだけじゃない。割れ目を上から下へなぞるように、ゆっくりと滑り降りていく。

「ひう……っ♡♡ そこ、だめ……っ♡♡」

「どこがだめなんだよ。ちゃんと言え」

「言えな……っ♡♡ あ♡ あ♡ そこ、入り口……っ♡♡ 入り口触らないでえ……っ♡♡♡」

「へえ。ここが入り口か」

中指の先端が、きゅっと窄まった膣口にめり込んだ。入ってはいない。ぐにぐにと押すだけ。それだけで快感が腰の奥から突き上げてきて、脚を閉じようとした。

——こじ開けられた。鬼頭先輩の膝が内腿に入り込んで、力ずくで。

「脚、閉じんな。全部見せろ」

「ひぐっ♡♡ やだぁ♡♡ 僕、男なのに……こんなところ……っ♡♡」

「男？ このびしょびしょのまんこで？」

指が膣口にずぶ、と沈んだ。

「あゝっ♡♡♡」

中指が一本。きつい膣壁が、鬼頭先輩の長い指を締め付ける。指先が奥へ進むたびに粘膜が押し広げられて、知らない感覚が背筋を這い上がった。

「ッ♡ あ♡ おく……奥まで、入って……っ♡♡」

子宮口に指先がこつん、と触れた。

「浅いところも奥もびっちゃびちゃだな。処女まんこからこんな溢れんの？」

「処女って言うなっ♡♡ 僕は——僕は男——あ♡ あ♡ あゝあゝっ♡♡♡」

ずちゅ、ずちゅ、とゆっくりピストンが始まった。指を引くたびに

愛液が粘く糸を引き、差し込むたびにぬちゃりと音が鳴る。

(やだ……やだやだ……♡♡ 先輩の指が僕の中で動いてる……♡♡
♡ 気持ちいい……♡♡ なんでこんなに気持ちいいの……っ♡♡
♡)

「二本目、入れんぞ」

「ま、待って——ひあああゝっ♡♡♡」

薬指が加わった。膣壁が押し広げられる。きつい。でも、びしょびしょに濡れた中は指を拒めなかった。むしろ——吸い込んでいく。

「きつ……すげえな。お前のまんこ、俺の指ぎゅうぎゅう締めてくんじゃん」

「しめて……ない……っ♡♡ かってに……かってになるのお……っ♡♡♡」

二本の指が中を探るように動いた。壁面をなぞり、撫で、——ある一点に触れた瞬間。

「おっ。ここか？」

「そこダメっ♡♡♡」

腰が跳ねた。マットの上でばたばたと身体が暴れる。ざらざらした粘膜の突起を、鬼頭先輩の指の腹がごりごりと擦り上げた。

「そこ触ったらっ♡♡ おかしくなっ——あゝ あゝ あゝ ……っ♡♡♡」

(Gスポット……♡♡ バスケ部の先輩に、Gスポ見つけられた……♡♡
…♡♡ だめ、こんなの……男がこんなところで感じるなんて……っ♡♡♡)

水音が変わった。くちゆくちゅという控えめな音が、じゅぶ、ぬちゃぬちゃ、と淫靡な粘りへ。愛液の量が跳ね上がっている。鬼頭先輩の掌を濡らし、手首まで伝い、マットに小さな染みを作っていく。

「すげえ出てんな。お前のまんこ、壊れた蛇口みてえだぞ」

「言わないでっ♡♡ 聞きたくない……っ♡♡♡」

「なんで。事実じゃん。俺の指二本突っ込まれて、まんこからだらだら汁垂らしてんだろ」

「あゝっ♡♡ あゝ あゝっ♡♡ せんば……やだっ♡♡ やだあ♡♡♡」

声が止まらない。鬼頭先輩のGスポット責めは正確で、しつこくて——まるでボールのハンドリングだった。手首の角度を微妙に変え、指先の圧を調節し、僕の一番弱い場所を的確に擦り続ける。

「イきそう……っ♡♡ 先輩、イきそう……っ♡♡♡」

「まだだ。イくなよ」

「む、無理……っ♡♡ 止められな——ひゝう♡♡♡」

鬼頭先輩の顔が、僕の股間に降りてきた。

「練習後の汗の匂い混じってんな……エロすぎだろ」

舌が、クリトリスを舐め上げた。

「ああああゝっ♡♡♡♡」

指は中をピストンしたまま。Gスポットを押し上げながら、舌先が

クリトリスをちろちろ弄って——そして吸った。ぢゅるっ、と卑猥な音を立てて。

「やっ♡♡ やだっ♡♡ 舐めないでっ♡♡ そこ舐めたらっ♡♡
ダメになるっ♡♡♡」

もうダメになっている。頭を左右に振って堪えようとするけれど、上と中を同時に攻められて、理性なんか持つわけがなかった。

「イクっ♡♡ イっちゃうっ♡♡ せんぱいっ♡♡ イっちゃうよ
お♡♡♡」

クリトリスを吸い上げられたまま、Gスポットをぐりっと押し込まれて——

壊れた。

「ひあああああゝっ♡♡♡♡♡」

カントが痙攣する。膣壁が鬼頭先輩の指をぎゅうぎゅう絞り上げ、背中がマットから浮いた。つま先まで電流が走り抜け、視界が白く弾ける。

初めての絶頂。自分のカントで——男に——イかされた。

（イッ、た……♡♡ 先輩に……イかされ……♡♡♡）

鬼頭先輩は、止まらなかった。

「やっ♡♡ イったばかり♡♡ だめっ♡♡ だめだめだめっ♡♡
♡♡」

舌と指が加速する。絶頂の余韻で過敏になったカントに、容赦のない刺激が襲いかかる。

ぷしゅっ♡♡

「あゝっ♡♡♡ な、なに——何か出て——♡♡♡」

ぷしゅっ、ぷしゅっ♡♡

鬼頭先輩の顔に、液体がかかった。

「すっげ噴いた。お前のまんこ最高だわ」

顔を上げた先輩の顎から、僕の潮と愛液が滴っている。拭いもしない。笑っていた。

「う……っ♡♡ やだぁ……♡♡ 恥ずかしい……っ♡♡♡」

涙が止まらない。羞恥と快感がぐちゃぐちゃに混ざって、自分が男なのか女なのか分からなくなる。

鬼頭先輩がバスケパンツを下ろした。

——息が止まった。

長くて、太くて、反り返っている。練習後で血が巡った下半身。太腿の筋肉が隆起して、その中心にある肉棒は血管が怒張して脈打っていた。先端から先走りが糸を引いて垂れている。亀頭のカリが大きく張り出していた。

「これ全部お前のせいだから。練習中からずっとこうなった」

「む、無理……っ♡♡ そんなの入らな——」

「入るよ。お前のまんこ、さっき俺の指二本で蕩けてたろ。ちんぽだって入る」

先端がカントの入口に触れた。

熱い。

ずぶ……♡

押し広げられていく。亀頭が膣口を通過するとき、きゅっと狭い場所を無理やり押し開かれる感覚に、背筋が弓なりに反った。

「ひう……っ♡♡ おっき……♡♡ 大きすぎ……っ♡♡♡」

ずぶ……ずぶ……♡♡

さっきまで指で散々ほぐされて、愛液と潮でびしょびしょの中だから——きつい、けれど滑る。粘膜がペニスの形に押し広げられていく感触が、背骨を伝って脳まで昇ってくる。怖い。怖いのに、カントが勝手に蠕動して鬼頭先輩を奥に引き込んでいく。

こっん♡♡

「っ♡♡♡ おく……おくに、当たってる……っ♡♡」

子宮口にペニスの先端が触れた。指よりもずっと大きくて硬い圧迫。お腹の中を異物が満たしている感覚に、涙がぼろぼろ溢れた。

「全部入った。お前の中、最高にきつくて熱い」

「っ……♡♡ 動かないで……まだ動かないで……っ♡♡♡」

「無理だろ、そんなの」

腰が引かれて——押し込まれた。

ずちゅ♡♡

「あゝ うっ♡♡♡」

ゆっくりだった。最初は。引いて、押して。引くたびに粘膜がペニスの形を名残惜しそうに追いかけて、押し込まれるたびに子宮口が圧されて火花が散る。

マットの上で、タンクトップ姿のまま腰を振る鬼頭先輩。僕もTシャツだけ着て下半身は裸。部活着のまま、こんな格好でセックスしている。用具室で。

ぐちゅ……じゅぷじゅぷ♡♡

天井の高い用具室に、水音が反響する。

「やだ……っ♡♡ 音、すごい……♡♡ こんな音出してるの僕の……っ♡♡♡」

「お前のまんこだろ。俺のちんぽ咥え込んで離さねえじゃん」

額から落ちた鬼頭先輩の汗が、僕の首筋にぽたりと落ちた。練習の汗とセックスの汗が混じった匂い。二人の肌が重なる場所がぬるぬると滑る。

（嘘……♡♡ なんで気持ちいい……っ♡♡ バスケ部の先輩のおちんぽで……♡♡ こんな……♡♡♡）

痛みが消えていた。いつの間にか。残っているのは快楽だけで、腰が——勝手に動く。鬼頭先輩のペニスを迎えるように、自分から押し返してしまっている。

「ほら。腰、動いてんぞ」

「ちが……っ♡♡ これは、勝手に——♡♡」

「勝手にまんこがちんぽ欲しがってんだろ。処女だったくせに、覚えんの早えな」

「違う違う違うっ♡♡♡」

違わない。分かってる。僕のカントは鬼頭先輩のペニスの形を覚え始めていて、一番気持ちいい角度を探して、自分から腰を揺らしている。

(認めたくない……♡♡ でも……気持ちいい……♡♡ 先輩の、奥まで来てる……♡♡♡)

ピストンが速くなった。正常位のまま、子宮をずんずん突き上げる。マットがずれ始め、僕の身体が揺れるたびにぱちゅん、ぱちゅんと結合部が鳴った。

「中に出す」

「っ！♡♡ だめっ♡♡ 中はだめっ♡♡」

「カントボーイは妊娠すんだろ。知ってる」

「知ってるなら出さないでっ♡♡♡ 妊娠しちゃうっ♡♡♡」

「知ってるから出すんだよ。孕めよ、俺の子」

「せんば——あゝ ひいっ♡♡♡♡」

子宮口にペニスの先端を押し当てたまま——射精した。

どぶ♡♡ どぶ♡♡ どぶ♡♡

脈動する射精。子宮壁を精液が叩く衝撃。熱い。とてつもなく熱くて、量が多い。お腹の中が先輩で満たされていく。

「な、中……っ♡♡ 熱いの出てるっ♡♡ いっぱい出てるっ♡♡♡」

中出しの衝撃で、僕もイった。カントがけいれんして、鬼頭先輩のペニスをぎゅうぎゅう絞り上げる。一滴残らず搾り取るみたいに。

「くっ……すげえ締め付け……搾り取る気かよ……」

「ちが♡♡ 勝手にっ♡♡ 勝手になってるのっ♡♡♡」

結合部の隙間から白濁液がとろりと溢れ、マットに垂れた。

抜かれない。まだ中に入ったまま、鬼頭先輩が僕の身体を持ち上げた。ぐらりと体勢が入れ替わる。先輩がマットに仰向けに寝転び、僕が上に乗せられた。

ずむん♡♡

「ひぁっ♡♡♡」

自重でさっきより深く入った。子宮口にめり込むくらい。

「自分で動け。お前が気持ちいいところ、自分で探してみろよ」

「そ、そんなの……できないっ……♡♡」

下からずん、と突き上げられた。

「あっ♡♡♡♡」

反射的に腰が動いた。逃げようとしたのか、もっと欲しがったのか、自分でも分からない。ただ一度動いたら——止まらなかった。

ぐちゅぐちゅ♡♡ ぬちゅぬちゅ♡♡

中に残った精液がかき混ぜられる音。自分が腰を振るたびに、先輩のペニスが一番奥を擦って、白い泡が結合部からぶくぶく溢れ出す

。

「ほら、自分から腰振ってんじゃん。処女のくせに、まんこが気持ちいい角度、自分で探してんだろ」

「探してない……っ♡♡ 勝手に……身体が……っ♡♡♡」

嘘だった。探していた。角度を変えると子宮の違う場所に当たって、そのたびに違う快感が走る。一番気持ちいい場所を、僕のカントが食欲に求めている。

汗で濡れたTシャツの下で乳首が透けている。先輩はそれを見上げながら、僕の腰の動きを眺めていた。カントから溢れた精液と愛液の混合液が、先輩の下腹部にとろとろ垂れていくのも。

(だめ……♡♡ 自分で腰振って……♡♡ 先輩のおちんぼで気持ちよくなってる……♡♡ 男なのに……♡♡ 僕、男なのに……っ♡♡♡)

快感が積み上がる。自分で角度を変えて、深さを調節して、子宮口にカリがかちゅんと引っかかるポイントを見つけてしまった。

「あ♡ そこ♡ そこ気持ちいい♡♡♡」

言ってから、口を押さえた。

「言ったな。自分で気持ちいいところ見つけて、自分で言ったな」

顔が燃えるように熱い。でもカントは止まらない。そのポイントを何度も何度もペニスに擦りつけて――

「出して……っ♡♡ 中に……っ♡♡ もっと出して……っ♡♡♡」

――声が勝手に出た。

自分の口から零れた言葉に、自分で驚いた。手で口を塞いだけれど、もう遅い。カントはきゅうきゅうと先輩のペニスを締め付けて、離そうとしない。

「いい子だ」

どぶ♡♡ どぶ♡♡ どぶどぶ♡♡♡

二回目。さっきより熱くて、量が多い。子宮に精液が注がれるたびに頭の奥がちかちか光る。僕のカントが——膈壁の全部で——先輩の精液を歓迎するみたいに収縮した。

そのまま崩れ落ちそうになった僕を、先輩が抱き止めて——四つん這いにさせた。

「せんば……っ♡♡ もう……もう無理……っ♡♡」

「無理じゃねえよ。まだ足りねえ」

後ろから。ぬぷっ♡♡と一息で奥まで。

「あゝっ♡♡♡ そこっ♡♡ さっきと違うところ当たってるっ♡♡
もっと奥っ♡♡♡」

この角度では子宮を突く場所が変わる。正常位では届かなかった深い場所に、ペニスの先端がずぶずぶとめり込んでいく。

鬼頭先輩の両手が腰骨を鷲掴んだ。バスケで鍛えた握力。骨が軋むほどの力で固定される。逃げ場がない。

ぱちゅん♡♡ ぱちゅん♡♡ ぱちゅん♡♡♡

結合部が叩き合う音が、用具室の鉄壁に跳ね返る。僕の身体がマットの上を前にずれるたびに、先輩が腰を掴んで引き戻す。

(あたまおかしくなる……♡♡ 後ろからつかれて……♡♡ 犬みたいな格好で……♡♡ バスケ部の用具室で……♡♡♡)

先輩の汗が僕の背中にぽたぽた落ちてくる。Tシャツは二人とも汗で完全に透けていた。汗と体液の匂いが用具室に充満して、呼吸するだけで頭がぼうっとする。

「せんば♡♡ せんぱい♡♡ だめ♡♡ おかしくなるっ♡♡♡」

「おかしくなれよ。お前のまんこ、もう俺のちんぼなしじゃ満足できねえ身体にしてやる」

ぞくり、と背筋が震えた。怖い。怖いのに——カントがきゅうっと締まった。

「あ。今すげえ締めたな。俺に脅されて興奮してんだろ」

「して……ないっ♡♡♡」

「嘘つけ。まんこが正直すぎんだよお前」

ぐちゅっ♡♡と深く突かれて、反論が喘ぎに変わった。

そこに——先輩の親指がアナルに触れた。

「こっちの穴にも興味あるんだよな」

「えっ……やだっ♡♡ そっちは違——あゝ あゝっ♡♡♡♡」

カントから溢れた精液と愛液を塗りつけて、ずぶり。カントにペニス、アナルに親指。

膣壁と直腸の間の、薄い壁越しに——ペニスと指が互いを感じ合う。

「やべえ。指とちんぽが中で当たってる。薄い壁一枚で、両方の穴犯されてんの分かるか」

「あゝ ひいっ♡♡♡♡ もう無理っ♡♡ 頭おかしくなるっ♡♡♡
両方っ♡♡ 両方動かさないでえ♡♡♡♡」

もう言葉になっていなかった。涎が顎から垂れてマットに落ちる。目の焦点が合わない。二つの穴を同時に犯されて、快楽が脳の許容量を超えている。

(男の身体に……♡♡ まんこと……お尻の穴……♡♡ 両方犯されて……♡♡ こんな人間の快感じゃ……♡♡♡)

三回目の射精は、二穴同時の状態で来た。

どぶんっ♡♡♡♡

子宮に精液が注がれると同時に、アナルの指がぐりぐりと腸壁を刺激して――

「おひゝ いいいいいっ♡♡♡♡♡♡」

白目を剥いた。悲鳴とも喘ぎともつかない声を上げて、全身をびくびく痙攣させながらマットに崩れ落ちた。

崩れた僕の両脚を、先輩が頭の後ろまで折り畳んだ。マングリ返し。自重と重力で、ペニスが最深部まで到達する。子宮口に完全に嵌め込まれた。

「この体勢が一番奥まで届く。種付けするにはこれだろ」

「せんぱ……♡♡ もうだめ……♡♡ 壊れちゃう……っ♡♡♡」

上から全体重をかけたピストン。身動きが取れない。自分のカント

が目の前にあった。鬼頭先輩のペニスが出入りしているのが——見える。

「見えるか？ 俺のちんぽがお前のまんこに出入りしてんの。精液まみれのまんこ、自分で見てろ」

見てしまった。白濁液と愛液がぐちゃぐちゃに混ざった自分のカントに、太いペニスが出たり入ったりしている。結合部に白い泡が溜まって、引くたびにどろりと溢れる。重力で僕の腹に流れ落ちて、臍に溜まっていく。

「やだ……っ♡♡ 見たくない……♡♡ でも目が離せない……っ♡♡♡」

「エロい顔してんぞ。おちんぽ入れられてまんこ見ながらイきそうな顔だ」

四回目。大量だった。カントが精液を受け止めきれず、挿入したまま隙間から溢れる。下腹部が精液の重みでぽっこり膨らんで見えた。

「あ……♡♡ お腹……♡♡ 先輩の精子で……ばんばん……っ♡♡♡」

目が虚ろになっていた。口は半開きで涎が垂れている。でもカントは——まだ鬼頭先輩のペニスをひくひくと吸い込むように蠕動していた。

ずるり、とペニスが抜かれた。精液がどろりと溢れ出す。

「……もういいだろ今日は。壊れちまう」

カントがひくひくと空を掴んだ。中に何もない。さっきまでぎゅうぎゅうに満たされていたのに。空虚。空虚が——耐えられなかった。

「……せんぱい」

「ん？」

「……もっと……して……っ♡♡」

「聞こえねえよ。何が欲しいか、ちゃんと言え」

(言ったらもう戻れない……♡♡ 僕が男だってこと……もう……♡♡♡)

でも。

「おちんぼ……もっと入れてください……っ♡♡♡ まんこが……空っぽだと、おかしくなるっ♡♡ 先輩のおちんぼが入ってないと……っ♡♡♡」

言ってしまった。男のプライドも、羞恥心も、全部かなぐり捨てて——おちんぼを下さいと。

鬼頭先輩の目が燃えた。

「自分で言ったな。もう加減しねえぞ」

用具室の壁に両手をつかされた。立ちバック。190cmと170cm。身長差20cm。僕はつま先立ちでも足りず、ほとんど吊り上げられた状態で——

ずぶっ♡♡♡

「あゝ あゝ っ♡♡♡♡」

下から突き上げられた。壁のコンクリートが頬に冷たい。でも身体は燃えるように熱い。

「もっと♡♡ もっと奥っ♡♡ せんぱい♡♡♡」

自分から腰を押し戻していた。もう恥ずかしさなんか、とっくに快楽に溺れている。

「いい子だな。自分からまんこ突き出してくんの、最高にエロいぞ」

ずぶずぶ、ぬちゃり、ぶちゅん♡♡——精液と愛液がぐちゃぐちゃに混じった音。立ちバックの体勢で、体液が太腿を伝って床に垂れていく。

「バスケ部のマネージャーがこんなメスだったなんてな」

「メスって言わないで……っ♡♡」

言いながら、カントがぎゅっと締まった。メスと呼ばれて——興奮している自分がいた。

用具室の隅。姿見。ダンス部との共用備品。

鬼頭先輩が、僕をそこに連れていった。後ろからペニスを挿入したまま。

鏡に——映っている。

「見ろよ。お前の顔」

見たくない。でも見てしまった。

Tシャツだけ着て下半身は裸。カントに太いペニスが突き刺さり、白濁液が太腿を伝っている。目は潤んで瞳孔が開いて、口は半開きで涎の跡。乳首がTシャツを突き破りそうに勃起している。